

山口県埋蔵文化財調査報告 第171集

もん ぜん 遺 跡
門 前

—平成5年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

1994

財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会

序

山口県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策が進められています。

私たちの郷土山口を築いてきた永い先人の営みを今に伝える歴史的資産を、こうした開発工事との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成5年度は、豊浦郡菊川町大字日新に所在する門前遺跡の発掘調査を実施し、当時の人々の生活文化の実態を知るうえで、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、広く文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として活用されることを願うものであります。

終わりに、発掘調査の実施に当たってご協力いただきました関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人山口県教育財団 理事長 高浜 哲
山口県教育委員会 教育長 高浜 哲

例 言

- 1 この報告書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成5年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査の内、豊浦郡菊川町大字日新に所在する門前遺跡の発掘調査をまとめたものである。
- 2 調査に当たっては、山口県農林部耕地課・山口県下関土地改良事務所・菊川町教育委員会・菊川町農村整備課及び地元関係者各位に多大な協力援助を受けた。
- 3 調査は、山口県教育財団指導主事藤上仁志・白岡太及び、山口県埋蔵文化財センター文化財専門員西岡義貴が担当した。
- 4 本書の作成に当たり、磁器の鑑定については、山口県立美術館学芸課長榎本徹氏、石器の石材については、山口県立山口博物館専門研究員亀谷敦氏から助言をいただいた。
- 5 本書に使用した遺跡位置図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図（厚狭・安岡）を複製したものである。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標の北で示し、標高は海拔高度をもとにしている。
- 7 図版中の遺物番号は、遺物実測図のそれと対応する。
- 8 本書で使用した遺跡略号は次のとおりである。
掘立柱建物跡：SB 土壌：SK 柱穴：P 溝状遺構：SD
- 9 この報告書に使用した土色の色調の表記はMunsell方式によった。
農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帖」
- 10 本書に収録した実測図・写真の作成及び本文の執筆にあたっては、白岡・藤上・西岡が分担し、編集は藤上が行った。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯	2
III	古墳	5
IV	中世の遺構と遺物	7
V	まとめ	16

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図	調査範囲図	2
第3図	遺構配置図	3・4
第4図	古墳石室実測図	6
第5図	出土遺物実測図(1)	7
第6図	掘立柱建物実測図(1)	9
第7図	掘立柱建物実測図(2)	10
第8図	掘立柱建物実測図(3)	11
第9図	土壌墓実測図	12
第10図	土壌実測図	13
第11図	出土遺物実測図(2)	15

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景 遺跡近景
図版2	遺跡全景 遺跡中央部掘立柱建物群
図版3	古墳全景 古墳遺物出土状況 古墳遺物出土状況
図版4	S B-14 土壌墓出土状況 S K-15出土状況
図版5	S K-11完掘 S K-12完掘 S K-17完掘 P114出土状況 S K-8出土状況 P187出土状況 S K-9・10出土状況 P243出土状況
図版6	出土遺物

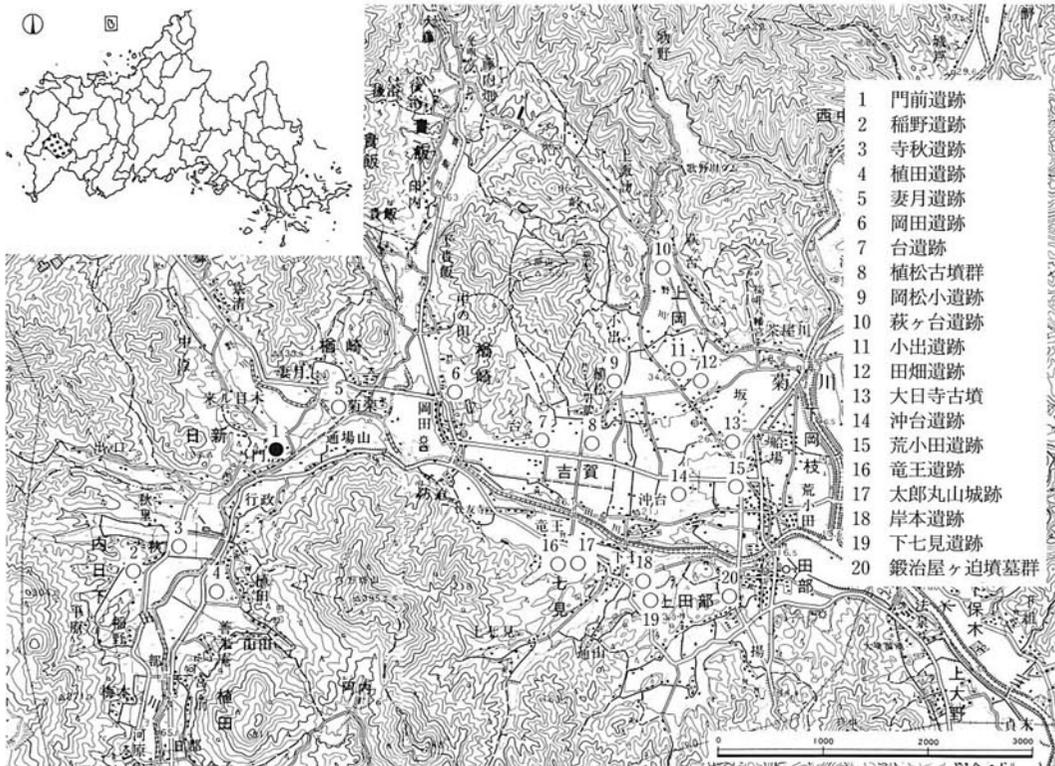
I 遺跡の位置と環境

門前遺跡は、豊浦郡菊川町大字日新に所在する。

菊川町は、山口県の西端部に位置し、西は豊浦町、東は下関市、北は豊浦町と接している内陸の町である。下関市吉田より瀬戸内海に流れ込む木屋川(吉田川)を河口から上流に約6 km さかのぼった所に盆地が開けている。菊川町の中心をなすこの盆地が「小日本」と呼ばれる田部盆地である。盆地の北側には中国山地の西端をなす華山山地が連なり、また、下関市内日を源流とする田部川が盆地のほぼ中央を東流し木屋川と合流する。

遺跡は勝陣山(344.6m)から東へ派生する比較的緩やかな丘陵の先端部、田部盆地と内日盆地の境界付近の田部川の左岸に立地している。標高約40m、田部川との比高差は約3 m である。遺跡の東には田部川をはさんで六万坊山(395.2m)がそびえる。

田部盆地は、下関市から内日盆地を經由して県中央部へ抜ける街道と、山陽と山陰を結ぶ連絡道の分岐点となっており、内陸交通の要衝として古くから栄えてたため多くの遺跡が分布している。弥生時代の遺跡としては、台遺跡、下七見遺跡、古墳時代としては大日寺古墳、植松古墳群、歴史時代の遺跡としては小出遺跡、田畑遺跡などが知られている。また、隣接する内日盆地にも縄文時代から弥生時代の寺秋遺跡や弥生時代の稲野遺跡や植田遺跡など多数の遺跡がある。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

II 調査の経緯

山口県では農業生産の安定的拡大を図るため、各地で圃場整備事業を推進している。これに伴い、山口県教育委員会では圃場整備地区内の埋蔵文化財を保護するため、事業に先立って遺跡の分布調査を行っている。菊川町の門前遺跡を含む地区の平成5年度の圃場予定地域については平成3年12月に分布調査を行った。その結果、中世の土器片や土壌、柱穴等の遺構を検出した。

これを踏まえて、山口県教育委員会では山口県農林部耕地課と協議を行い、事前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることとなった。調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて、工事で掘削される部分の内約2500m²を調査することとなった。

調査は平成5年8月11日より開始した。まず、調査区内にトレンチを開け、遺構面の深さを調べた。次に重機により遺構面の直上までの耕土、盤土等を除去した後、人力による遺構検出を行った。その結果、土壌、溝状遺構、柱穴などが検出され、それぞれ掘り込みを行った後、写真撮影、実測を行った。

発掘調査の結果については、同年10月23日に現地説明会を行い、地域の人々に遺跡の概要を説明した。貴重な歴史的資料を得て、同年11月5日に現地ですべての調査を終了した。



第2図 調査範囲図



第3図 遺構配置図

III 古墳

1 概要

遺跡が所在する丘陵上北東端部に築造された古墳で、内部主体は横穴式石室。調査区内の遺構面検出作業中、石材の一部（石室左側壁上部）を確認したため、当該部分の拡張を行い、その全容を捉えた。（本文中の左右は、羨道から玄室方向を見た場合の方向。）

2 外部施設

後世における周辺一帯の開墾により墳丘及び石室の大部分はすでに消滅し、周溝も削平を受けて溝底の一部をわずかにとどめている。遺存部分では溝幅は約0.5～1 m、深さ10～20cm。これより古墳の旧状を推計すると、直径約8 mの円墳であったと考えられる。墓道は短く、南東方向に緩く斜降する。遺存幅約1 m、深さ約0.5mを測る。

3 内部構造

南東方向に開口し、主軸方向はN32°W。石室の上部構造のほとんどを欠失。腰石は左側のみ遺存。高さ38cm×幅77cm×厚さ36cm（各最大値）の直方体状の大型石材を横長に据え、裏側には長径約30cmの角礫を用いて裏込めとしている。床面の敷石は比較的良好に遺存。10～20 cm程度の上面平らな石材を丁寧に敷き詰めている。その状況から玄室の規模を推定すると、奥行き約2.5m×幅約0.8mで、平面プランは長方形。玄門や袖石等の構造については判然としない。羨道部はすでに消失しているが、掘形等の遺存状況から長さ約2 m内外と推定できる。石室掘形の平面形は羽子板状。主軸長約3.9m、幅は奥壁側約2.1m、羨道部約2 m。羨道部付近から急に狭まり、墓道へとつながる。

4 出土遺物

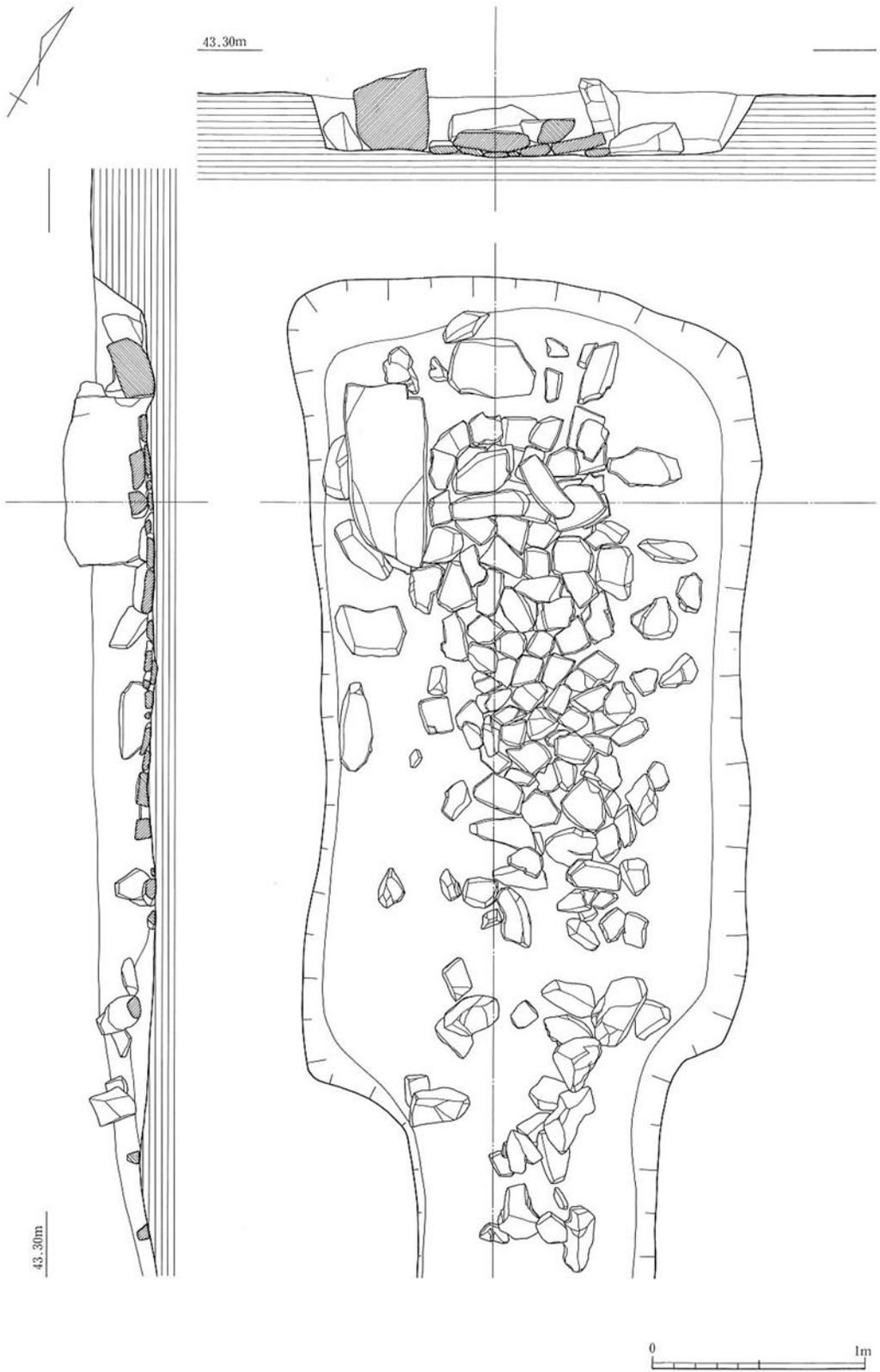
玄室内から須恵器と装身具（耳環）が出土。攪乱により、すべて床面から浮いた状態で出土した。

須恵器

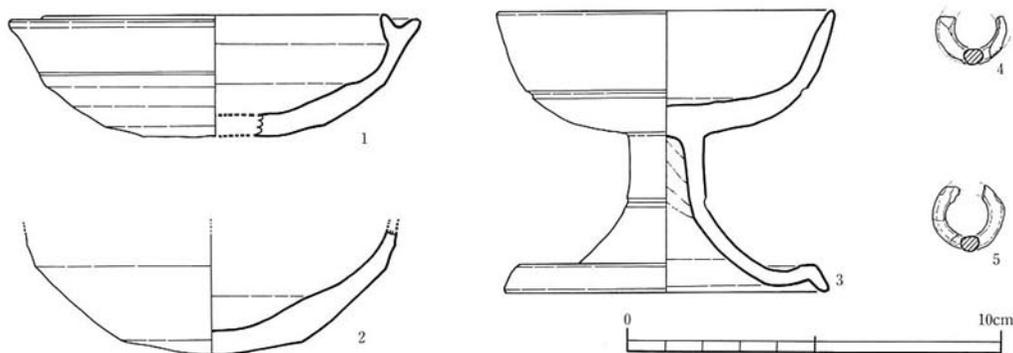
1は坏身で、受部の立ち上がりは低い。底部外面は回転ヘラ削り、内面は不整方向のナデ、他は回転ナデ調整。口縁の一部に焼け歪みがみとめられる。2は、底部片。丸底。回転ナデ調整を基調とし、内面は不整方向のナデ、外面は回転ヘラ削りで仕上げる。残存部の形状から、平瓶または短頸壺等の破片と考えられる。3は高坏。坏部は体部が外上方へやや開き気味に立ち上がる。脚部は裾に向かって大きく広がり、脚端を下方に短く折り曲げる。坏部の底端部に沈線1条、脚部中央に沈線1条がめぐる。器面は回転ナデ調整。

装身具

銅地に鍍金されたとみられる耳環2点（1対分）が出土。いずれも錆化により、金箔の剝離が著しい。4は、外径1.9cm（推定）、内径1.08cm。環の断面は、5.1mm×4.2mmの長円形をなす。5は外径1.81cm、内径1.12cm。環の断面は、4.9mm×3.8mmの長円形。



第4図 古墳石室実測図



第5図 出土遺物実測図(1)

IV 中世の遺構と遺物

1 遺構

今回の調査で検出された中世の遺構は、掘立柱建物15棟を含む柱穴多数、土壇15基、土壇墓1基、溝状遺構9条などである。出土遺物から各遺構の時期は13世紀～14世紀（鎌倉時代から室町時代）と考えられる。遺構面は後世の開発により削平されたものとみられ、遺構自体は浅いものが多く、残存状況は全体的に良くない。層序は耕作土、盤土、遺構面の順に堆積がある。ここでは、その主な遺構についての概要を述べることにする。

(1) 掘立柱建物

調査区の全域から、柱穴と見られる小ピットを多数検出した。それらの多くは、掘立柱建物を構成していたと考えられるが、建物として復元し得たものは15棟である。掘立柱建物は3グループに大別される。調査区の中央から東側の棟方向が北東あるいは南東を向く建物群（SB-1～6）、調査区の西側の棟方向が北北東あるいは西北西を向く建物群（SB-7～13）、調査区のほぼ中央の前記2グループよりも時期が後の建物群（SB-14・15）である。以下個々の建物について概略を記述する。

SB-1 棟方向 N75°E の2間（4 m）×1間（1.8m）の建物。柱間寸法は桁行が1.8～2 m、梁行が1.8mである。

SB-2 棟方向 N70°E の3間（5.5m）×2間（4 m）の建物。柱間寸法は桁行が2.4～3 m、梁行が1.5～1.8mである。

SB-3 棟方向 N70°E の7.5間（13.5m）×2.5間（4.5m）の建物。柱間寸法は桁行が2.5m、梁行が2.5mの前半のグループでは最大級の建物である。建物の南北両側に0.5間の廊下状の施設があったと考えられる。また、建物の東には、建物と同時期に比定されるかすがい型のSD-4が建物に対して平行に走っており、雨落溝あるいは屋敷を区画する溝と考えられる。

SB-4 棟方向 N70°E の2間（4 m）×1.5間（2.6m）の建物。柱間寸法は桁行が2 m、梁行が2.6mである。

S B—5 棟方向 N25°W の 2 間 (4 m)×1.5 間 (2.6m) の建物。柱間寸法は桁行が 2 m、梁行が 2.4～2.6m である。建物の南東が SD—8 に攪乱されており、建物が北東方向に 1.5 間延びる可能性がある。

S B—6 棟方向 N20°W の 2 間 (4 m)×2 間 (4 m) のほぼ正方形の建物である。柱間寸法は桁行 1.8～2 m、梁行が 4 m である。建物の北側と東側に 0.5 間の廊下状の施設があったと考えられる。

S B—7 棟方向 N50°W の 2 間 (4 m)×1.5 間 (2.8m) の建物。柱間寸法は桁行が 1.8～2 m、梁行が 2.8m である。

S B—8 棟方向 N55°W の 2 間 (4 m)×1.5 間 (2.7m) の建物。柱間寸法は桁行が 2 m、梁行が 1.2～2.5m である。

S B—9 棟方向 N90°W の 3 間 (6 m)×2 間 (4 m) の建物。柱間寸法は桁行・梁行ともに 2 m である。

S B—10 棟方向 N50°E の 2 間 (4 m)×2 間 (3.5m) の建物。柱間寸法は桁行・梁行ともに 1.8m である。調査区の南東端に位置しており、調査区外に延びる可能性がある。

S B—11 棟方向 N50°E の 3 間 (5.5m)×2 間 (4 m) の建物。柱間寸法は桁行・梁行ともに 1.8m である。北西端の柱穴は調査区外のため、未検出である。

S B—12 棟方向 N45°E の 2.5 間 (4.5m)×2 間 (4 m) の建物。柱間寸法は桁行・梁行ともに 2 m である。

S B—13 棟方向 N15°E の 3 間 (5.5m)×2 間 (3.5m) の建物。柱間寸法は桁行・梁行ともに 1.8m である。調査区の北西端に位置しており、北西側の柱穴は調査区外のため未検出であり、建物が北方向に延びる可能性がある。

S B—14 棟方向 N75°E の 4 間 (7.5m)×3.5 間 (6.5m) の建物。柱間寸法は桁行が 2.5m、梁行が 3～3.2m である。他の建物と比べると、柱穴が直径 50～80cm、深さが 45～60cm と深くしっかりとしており、根石と思われる石を検出した柱穴もあった。これらのことからこの建物はかなり規模の大きい建物であったと考えられる。また、南側をのぞく 3 方を溝が囲んでいることから他の建物とは性格を異にする建物と考えられる。

S B—15 棟方向 N70°E の 4 間 (8 m)×2 間 (4 m) の建物。柱間寸法は桁行が 1.5～2.5m、梁行が 1.8m である。北側に 0.5 間の廊下状の施設があったと考えられる。

(2) 溝状遺構

発見された溝状遺構は、掘立柱建物を囲むものとその他のものに分けられ、建物に対してほぼ直行あるいは平行に走っている。以下、個々の溝状遺構について概略を記述する。

S D—1 調査区の東を南北に走っており、幅 50cm 内外、深さ 4 cm 前後である。

S D—2 調査区の東を SD—1 とほぼ直行して東西に走っており、幅 70cm 内外、深さ 5～10 cm である。

SD-3 調査区の東をSD-1とほぼ平行に南北に走っており、幅45~50cm、深さ4~13cmである。

SD-4 調査区の中央部の東よりを南北に長くかすがい型に走っており、幅70cm~110cm、深さ5~8cmである。SB-3の東に隣接し、囲むように走っており、SB-3に付随する溝と考えられる。

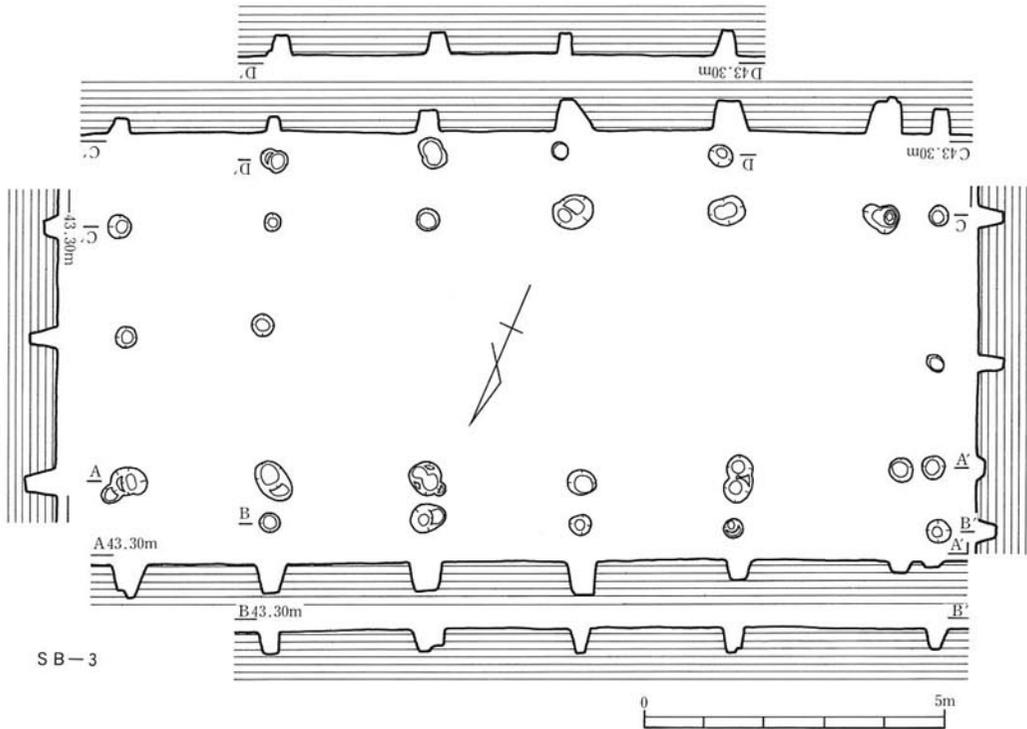
SD-5 調査区の中央部の東よりを南北に走っており、幅35~45cm、深さ2~5cmである。SD-4と切り合いがあり、SD-4より新しい。

SD-6 調査区の中央を南北から東西にL字型に走っており、幅20cm~80cm、深さ4cm前後である。

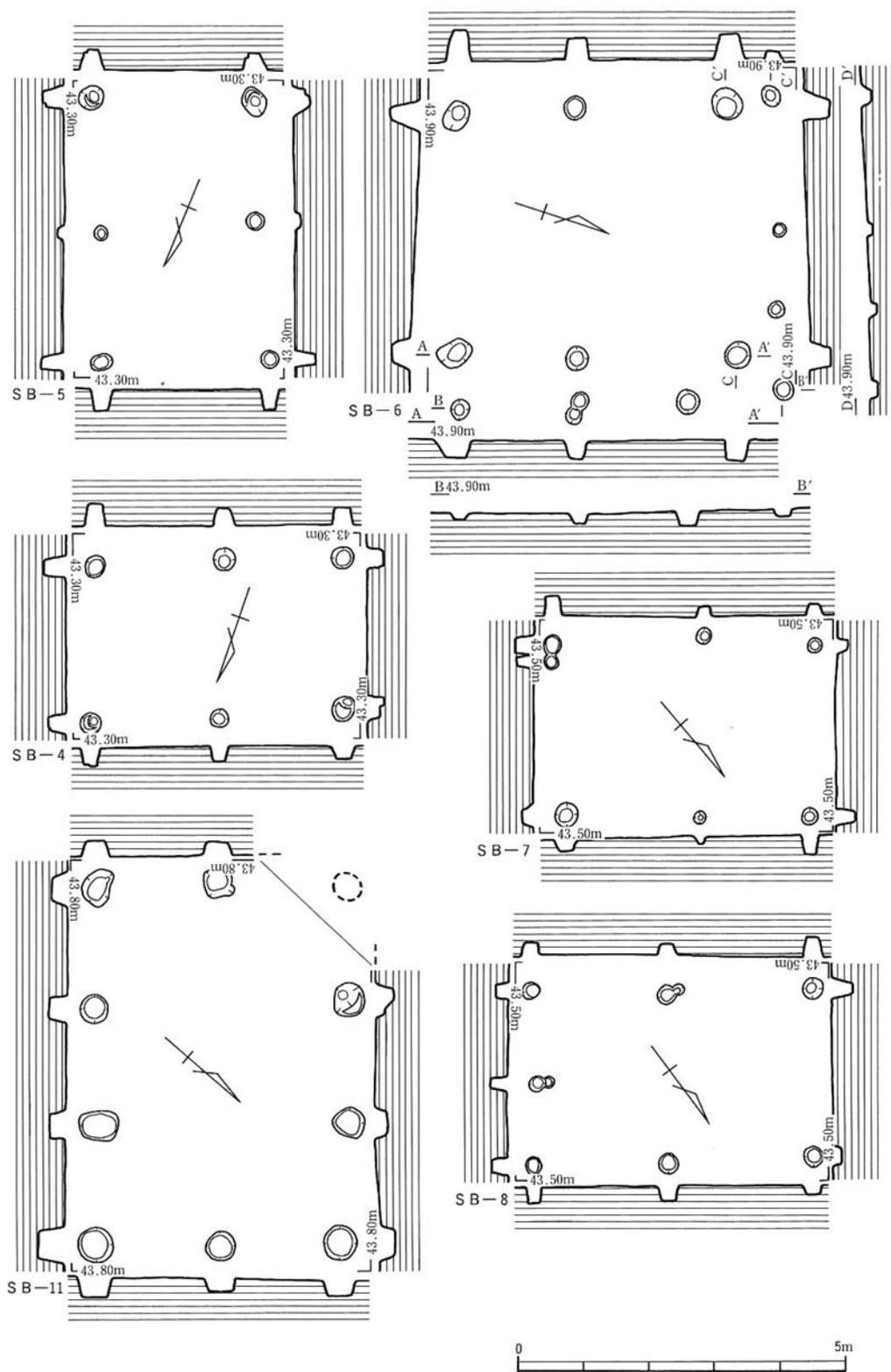
SD-7 調査区の中央をSD-6に隣接して東西から南北に走っており、幅30cm内外、深さ6~10cmである。SD-6、SD-7はSB-14の3方を囲んでいる。削平が激しく、SD-6とSD-7がつながっていたかどうかは不明であるが、遺物からSD-6・7、SB-14は同時期であり、SB-14に付随する溝であると考えられる。

SD-8 調査区の中央北部を南北に走っており、幅35cm~55cm、深さ35cm~55cmである。SD-7と切り合いがあり、SD-7より古い時期のものである。

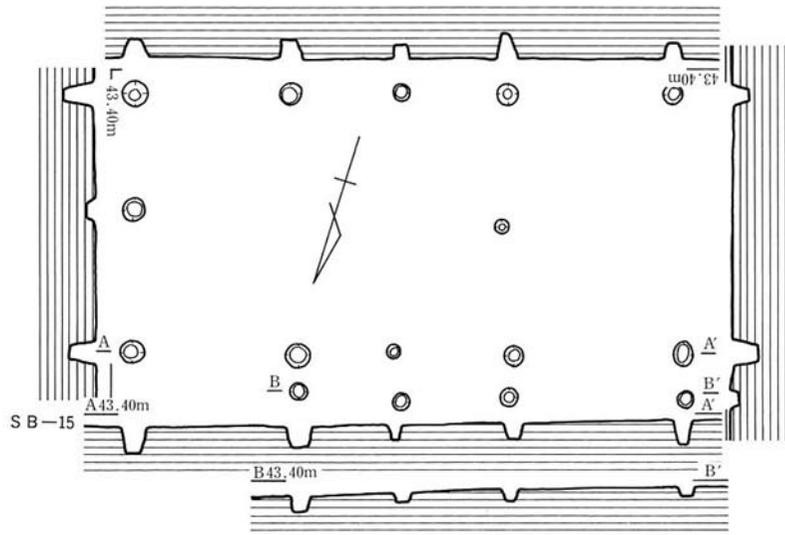
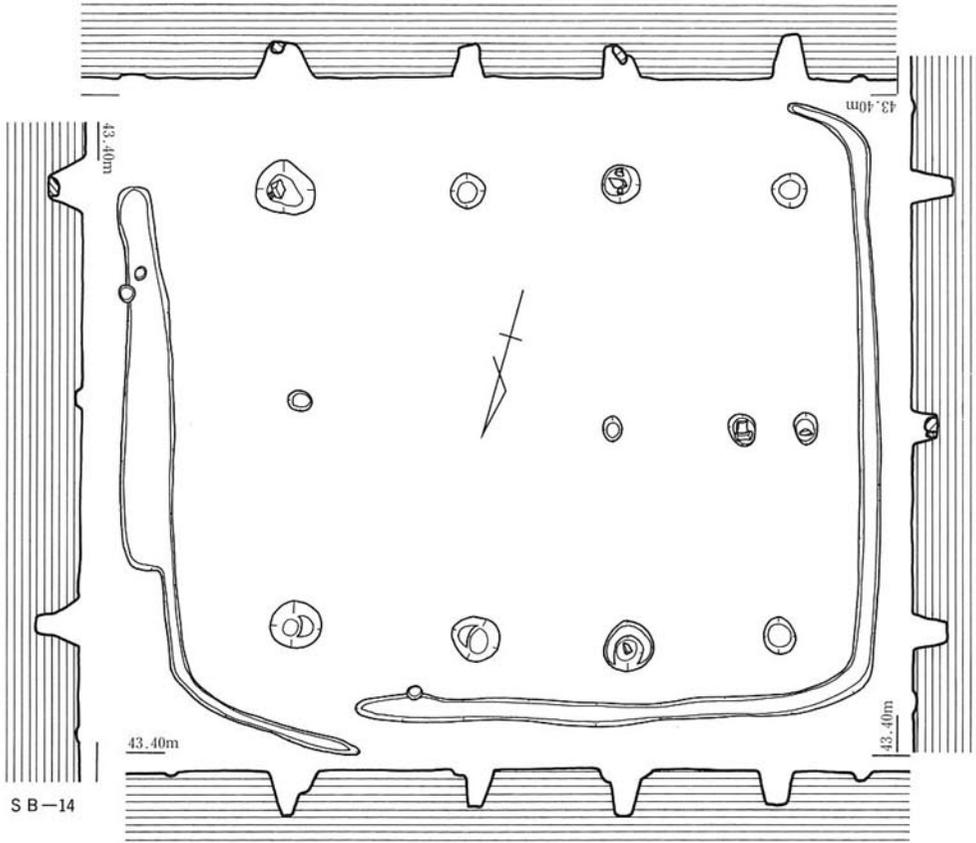
SD-9 調査区の中央西側を南北に走っており、幅25cm内外、深さ5~7cmである。



第6図 掘立柱建物実測図(1)



第7図 掘立柱建物(2)



第8図 掘立柱建物(3)

(3) 土墳墓

調査区の中央北西部に発見された土墳墓である。主軸を北西に向け、長軸170cm、短軸50cm、深さ80cmである。土師器の坏や皿が発見された。長軸方向の壁面は多少袋状になっている。壁面と底部に青灰色の粘土が貼ってあった。40cm前後の石が底部より浮いた状態で検出されており、墓石であったと考えられる。また、底部より板状の木片が検出されており、木棺墓であった可能性がある。

(4) 土壇

土壇は、調査区全体から検出されているが、浅いものが多く、残存状況は良くない。以下、個々の土壇について概略を記述する。

SK-1 平面形はほぼ円形で直径100cmから110cm、最深部110cmである。

SK-2 平面形は長円形で、長軸120cm、短軸70cm、最深部15cmである。

SK-3 平面形は長円形で、長軸280cm、短軸85cm、最深部20cmである。

SK-4 平面形は円形で直径140～145cm、最深部10cmである。土師皿片が出土した。

SK-5 平面形は不整形円形で直径150～165cm、最深部25cmである。焦土塊（スクリントーンで示した部分）とともに5個の土師器の坏が出土した。

SK-6 平面形は円形で直径は90cm、最深部12cmである。

SK-7 平面形は方形で、長軸135cm、短軸90cmである。

SK-8 平面形は長円形で、長軸140cm、短軸40cm、最深部8cmである。SD-6に切られている。土師器の皿5枚、坏、瓦質の鍋片、白磁片などが出土した。

SK-9 平面形は楕円形で、長軸120cm、短軸90cm、最深部24cmである。

SK-10 平面形は不整形長円形で、長軸280cm、短軸145cm、最深部20cmである。SK-9との切り合いは不明。土師器の皿、坏などが出土した。

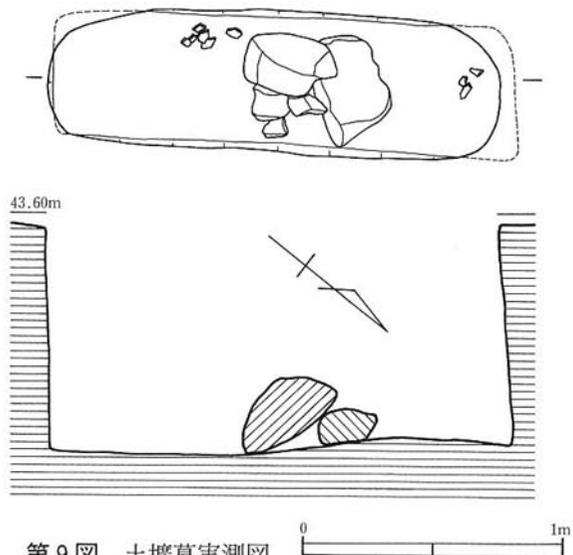
SK-11 平面形は長円形で、長軸160cm、短軸95cm、最深部35cmである。底部から青灰色の粘土層が検出された。

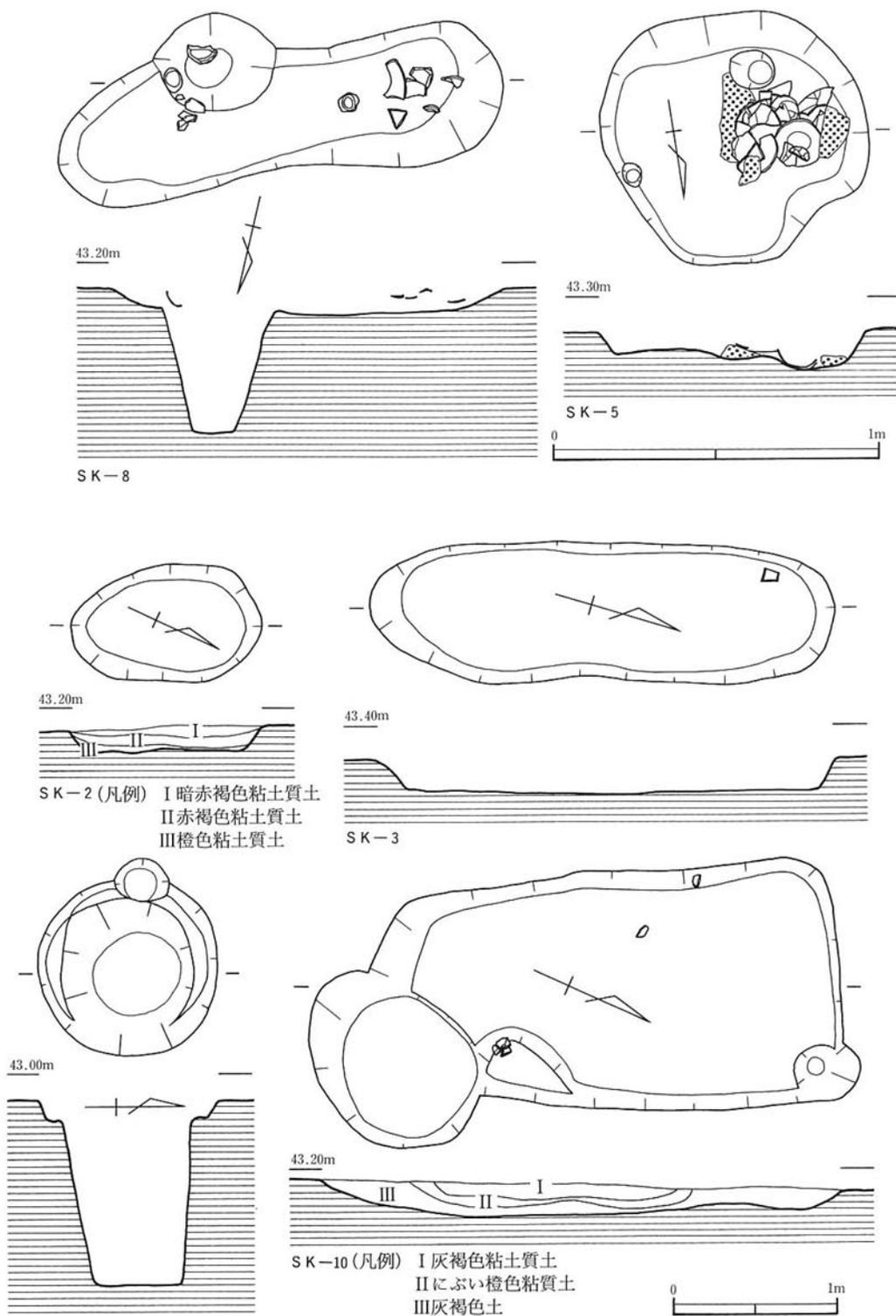
SK-12 平面形は長円形で、長軸140cm、短軸90cm、最深部22cmである。SD-7に切られている。

SK-13 平面形は長円形で、長軸200cm、短軸50cm、最深部20cmである。

SK-14 平面形は不整形円形で、直径115～130cm、最深部90cmである。

SK-15 平面形は長円形で、長軸170cm、短軸50cm、最深部80cmである。





第10図 土壌実測図

2 遺物

今回の調査で出土した遺物は、13～14世紀の所産とみられる土師器、瓦質土器、白磁、青磁などである。以下、図化できた遺物について記述していく。

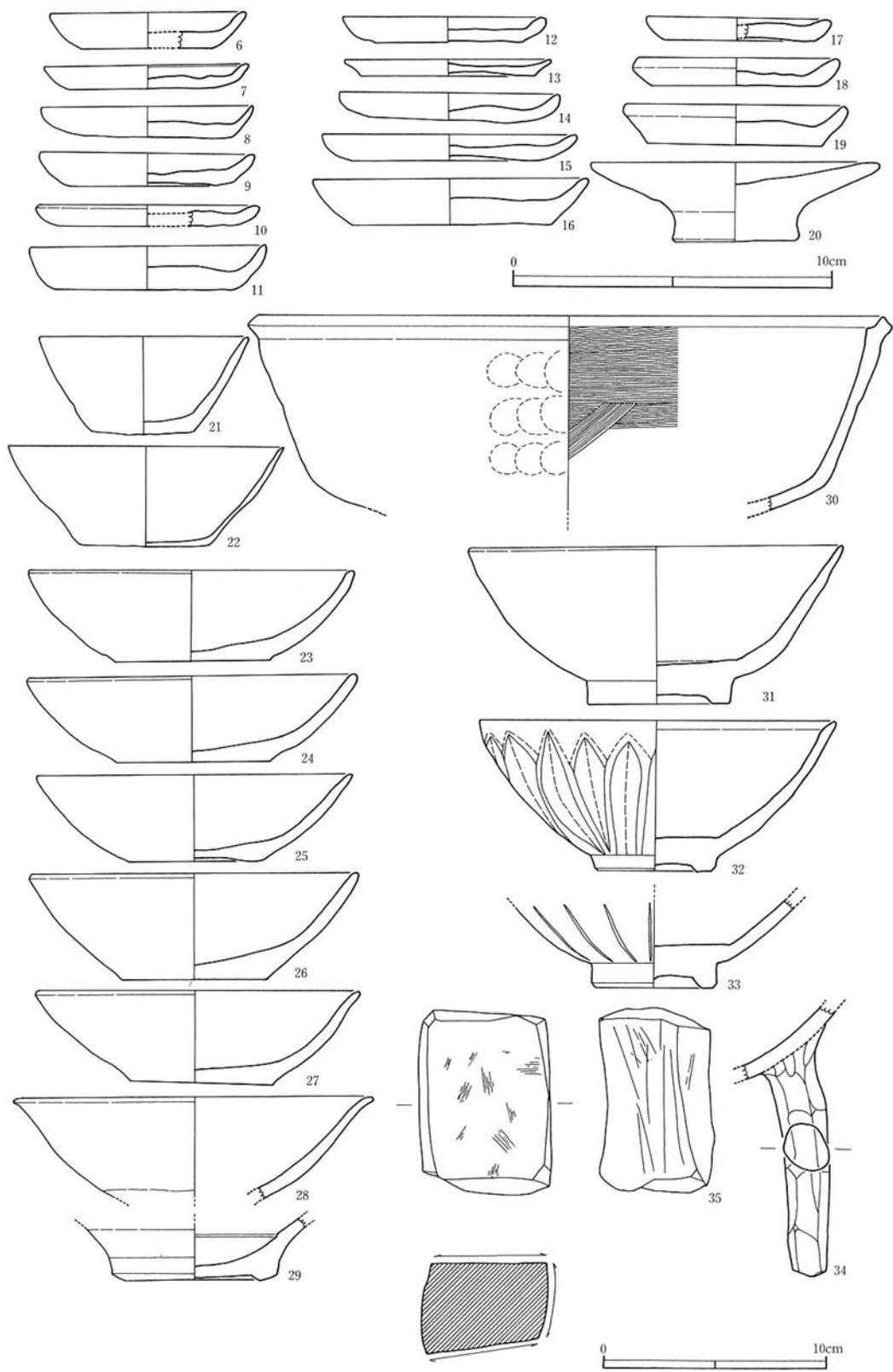
土師器(6～27) 6～19は皿である。器高は0.5～1.4cmであるが、口径は5.4～6.6cmの比較的小さいもの(6～10・12～14・17～19)と、口径7.2～8.4cmのものに分かれる。6・16は赤褐色、7～9は浅黄橙色、10は灰褐色、11は橙色、12・14・15・18は黄橙色、13は明褐色、17・19は褐灰色である。6・9・11・14～19の底部は回転糸切り、8は底部外面に板目痕を残す。7・8・14・18は底部内面に凹凸、10は底部内外両面とも凹凸がある。9の外面の一部にすずが付着している。6はSK-10、7～11はSK-8、12はP103、13はP211、14はP179、15はP237、16はP151、17はP169、18はP168、19はP184から出土。20は台付き皿である。黄橙色で底部は回転糸切り。P8から出土。21～27は坏である。21は器高4.3cm、口径9cm、細粒を少し含む灰褐色、ロクロナデである。体部外面に緩い凹凸があり、底部は回転糸切り。SK-8から出土。22は器高4.4cm、口径12.2cm、砂粒を含む浅黄橙色、ロクロナデである。器壁は薄く外面に凹凸がある。外面の一部にすずが付着している。SK-10から出土。23～27は器高3.8～4.1cm、口径14～14.2cm、胎土にやや砂粒を含み、23・25～27は浅黄橙色、24は淡黄色である。24～27はロクロナデ、23・24・26・27の底部は回転糸切り。いずれもSK-5から出土。

瓦質土器(30・34) 30は鍋である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部をわずかに外折する。外面は指圧調整の後ナデ、体部内面はヨコハケメを残す。底部外面にすずが付着している。SK-8から出土。33は足鍋の足である。胎土は細粒を多く含む。指圧根を残す。今回の調査で出土した唯一の足鍋である。P87から出土。

白磁(28・29) 28は同安窯系白磁碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁はやや端反り。灰白色の釉がかかる。高台部は露胎。見込みに重ね焼き痕を残す。P25から出土。29は同安窯系白磁碗の底部である。灰白色の釉がかかる。高台部は露胎。高台は削り出し、体部と高台の境に内外両面とも1条の沈線を施す。SK-8から出土。

青磁(31～33) いずれも碗である。31は器高7cm、口径16.4cm、緑灰色の釉がかかる。高台内部は露胎。体部は内外面とも丁寧なナデ、高台は削り出し、体部と底部の内面境に1条の沈線を施す。P243から出土。32は龍泉窯系青磁、器高7.6cm、口径15.8cm、緑灰色釉がかかる。高台内部と畳付けは露胎。高台は削り出し。鎗蓮弁を描いている。33とともにP114から出土。33は碗の底部である。明緑灰色の釉がかかる。高台内面と畳付けは露胎。胎部と底部内面の境に1条の沈線を施す。外面に櫛状工具による文様を描いている。内面に重ね焼き痕を残す。

砥石(35) 35は砥石である。4面のうち3面を使用している。そのうちの1面は刃つぶしに使用したと思われる。



第11図 出土遺物実測図(2)

V まとめ

今回の調査結果、古墳1基、中世の掘立柱建物15棟を含む柱穴多数、土壙15基、土壙墓1基、溝状遺構9条などの遺構と、古墳時代の須恵器・耳環、中世の土師器・瓦質土器・輸入磁器などの遺物が検出された。

このうち、古墳は、南東方向に開口する横穴式石室を内部主体とする。しかし、中世末～近世に行われたと思われる周辺一帯の水田開発でその大半が削平消滅し、わずかに周溝と主体部の一部をとどめるに過ぎなかった。このため、当初の規模や構造など詳細は不明となっているが、周溝の遺存状況から墳丘直径約8 m程度の円墳であったと考えられる。古墳の築造時期については、須恵器などの石室内出土遺物を勘案して、6世紀末～7世紀初頭頃に比定して大過なからう。

なお、調査中、付近の水田畦畔部分などに、大型自然石の使用が多見された。個々の大きさや形状から、本古墳同様の石室構築材(石材)の一部であった可能性が指摘され、よって、当地には、少なくとも複数の古墳が存在したことになる。もとより、内日盆地から田部盆地へと続く田部川上流域には、山脚から張り出す低丘陵の先端部縁辺を拓いて築かれた植松・坂ノ上(菊川町)など比較的小規模な古墳群が分布する。各々の立地や構造的な特色、出土遺物などは、いずれも共通するものであり、したがって、これらが古墳時代後期のほぼ時を同じくして連続と造営された墓地群であり、本古墳もその一つであったことは想像に難くない。

中世の集落関連遺構は、調査区のほぼ全面から検出された。復元し得た掘立柱建物は15棟。調査区東側の建物群がほぼ棟方向をそろえているのに対し、西側のものには若干のばらつきがみられる。中央に位置するSB-14は、規模で他を圧倒し、三方に溝を配するなど、その構造上の特異性が明らかで、集落の中心的建物であったことは確実である。検出された建物群の時期決定は、伴出遺物が量的に少ないため困難であるが、土師器などから13～14世紀頃と考えられよう。

集落の範囲は、さらに西側への広がりが推定されるが、地形的にみてその大部分が調査区内におさまっているとみてよい。建物の分布状況や立地条件などから、これら一連の建物群は、農耕など生活面に利便性の高い田部川の水系に近接した微高地を選定して形成された単位集落と見做される。また、県内における同時期の集落関係建物と比較するに、SB-14を除く各建物の規模や構造は通常の範疇に属するものであり、分布の密度などからみても、当時の一般的な様相をとどめる集落であったといえよう。

以上、限られた調査期間のため発掘面積も狭く、各遺構の性格づけを行うに十分な資料は得られなかったが、従来、空白部分となっていた内日盆地と田部盆地の接点となる当地での古墳時代～中世の歴史的事実の一端を明らかにし得たことは大きな成果であった。



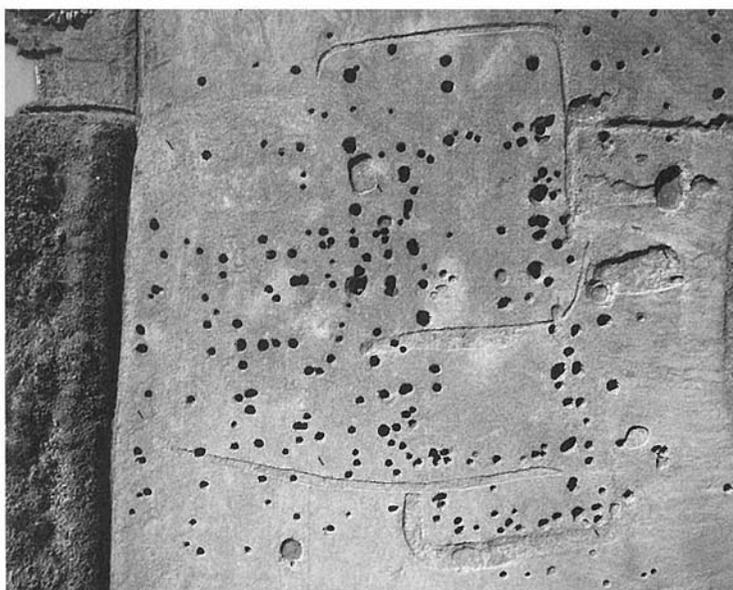
遺跡遠景



遺跡近景

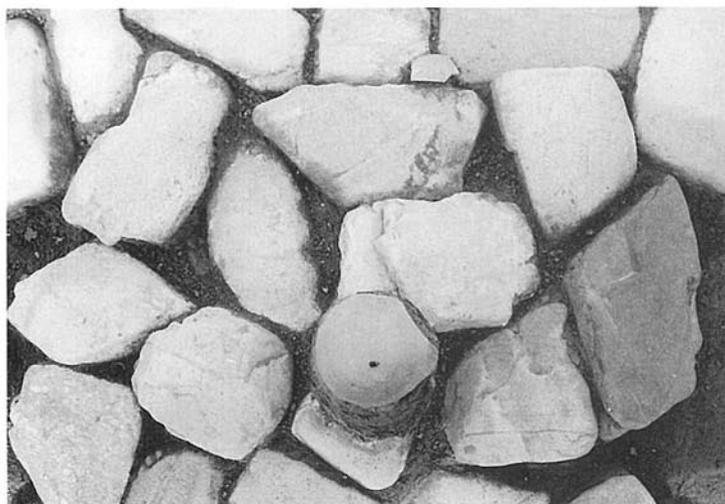


遺跡全景



遺跡中央部
掘立柱建物群

古墳全景



古墳遺物出土状況

古墳遺物出土状況

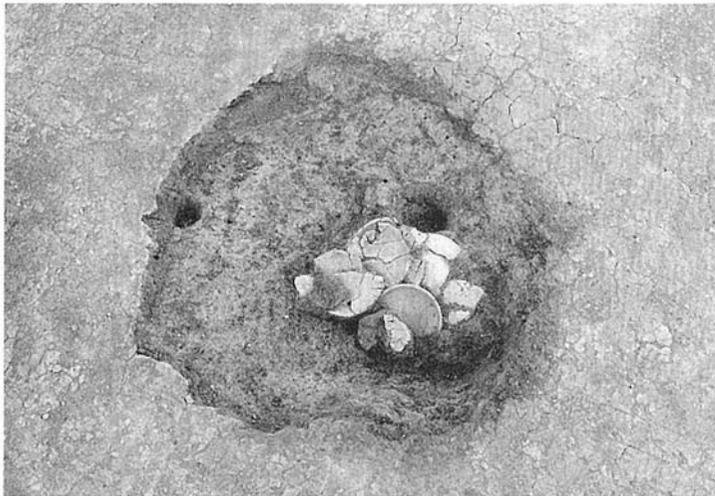
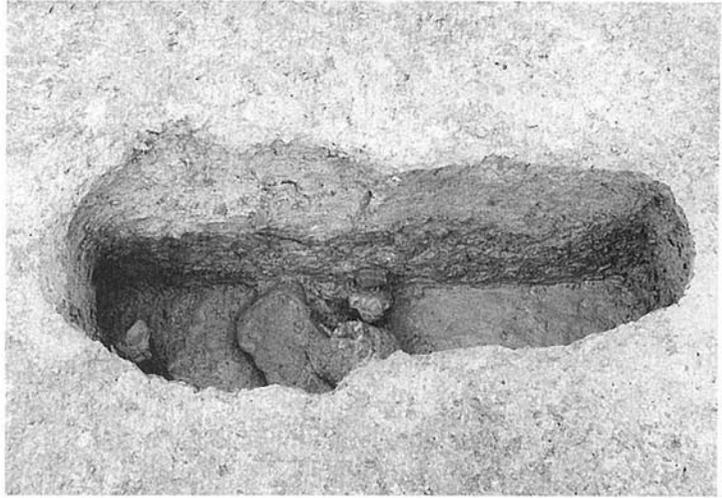


図版 4



S B-14

土壇墓出土状況



S K-5 出土状況



SK-1 完掘



SK-2 完掘



SK-7 完掘



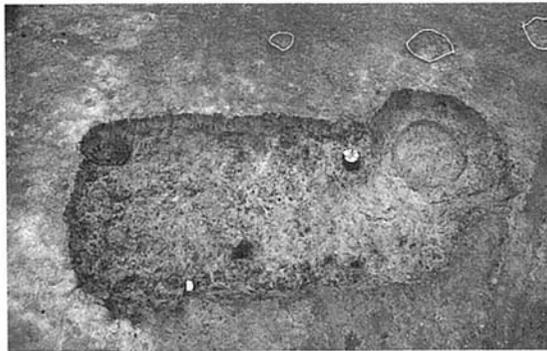
P114 出土状況



SK-8 出土状況



P187 出土状況

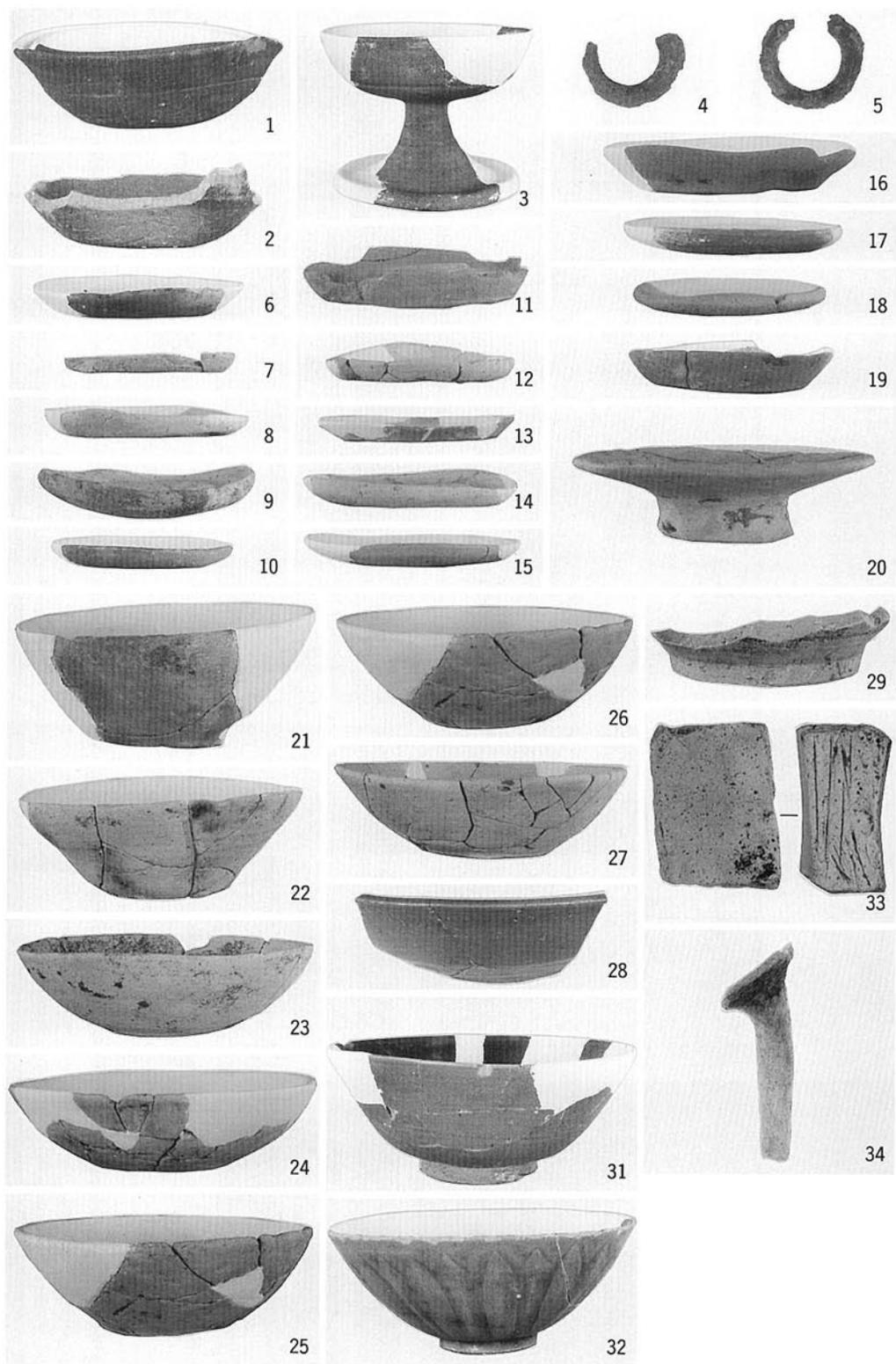


SK-9・10 出土状況



P243 出土状況

図版 6



出土遺物

山口県埋蔵文化財調査報告 第171集

門前遺跡

—平成5年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

1994年 3月

編集 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
発行 財団法人 山口県教育財団
山口県教育委員会
印刷 大村印刷株式会社